

第19回 神経眼科コロキウム～細雪の会～

日本眼科学会専門医制度生涯教育事業 1単位 (No.24128)

日時

2026年5月24日(日) 10:00開始

場所

ホテル竹園芦屋 3F「飛鳥の間」(現地開催)

住所：芦屋市大原町10-1 TEL：0797-31-2341 (代表)

会費

1,000円 ※ [情報交換会も予定しております。](#)

※ 講演会・情報交換会にご参加される場合は、5月11日(月)迄に
下記リンク/2次元コードより、ご登録をお願い申し上げます。

<https://forms.gle/AJS4w3eSEyccfDkaA>



プログラム

10:00～10:30 教育講演 『当院での視神経炎治療の実際』

座長

中西 裕子 先生

(神戸大学大学院 医学研究科外科系講座眼科学分野 准教授)

演者

望月 嘉人 先生

(兵庫医科大学 眼科学教室 助教)

10:30～11:30 特別講演 I

『疾学研究から探る緑内障リスク因子に関する知見』

座長

横田 聡 先生

(神戸市立神戸アイセンター病院 医長)

演者

羽入田 明子 先生

(慶應義塾大学医学部眼科学教室 専任講師)

11:30～12:30 特別講演 II 『解説：ザギングアイ症候群』

座長

中村 誠 先生

(神戸大学大学院 医学研究科外科系講座眼科学分野 教授)

演者

後関 利明 先生

(国際医療福祉大学 熱海病院眼科部長 / 医学部眼科学教授)

お問い合わせ

担当：久野真央 (mao.hisano@santen.com)

共催：兵庫県眼科医会 / 参天製薬株式会社



一般講演

『当院での視神経炎治療の実際』

望月 嘉人 先生

兵庫医科大学 眼科学教室 助教

視神経炎には、抗体陰性例のほか、抗MOG抗体陽性例や抗AQP4抗体陽性例などが含まれ、それぞれにおいて臨床像、病態、治療反応性は大きく異なります。教科書的に記載されている経過と、実際の臨床経過が必ずしも一致しない症例も少なくありません。近年、抗AQP4抗体陽性視神経炎に対しては、生物学的製剤の使用が進み、治療の選択肢も拡大しています。本講演では、当院で経験した視神経炎症例を通じて、各病型の特徴や治療反応性を紹介し、「視神経炎」という一語では括れない多様性と、症例ごとにオーダーメイドな対応が必要であることについて解説します。



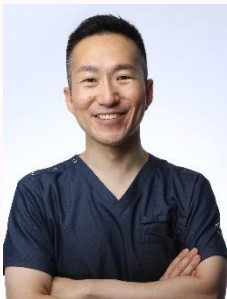
特別講演 I

『疫学研究から探る緑内障リスク因子に関する知見』

羽入田 明子 先生

慶應義塾大学医学部眼科学教室 専任講師

現在に至るまで、緑内障のエビデンスに基づく予防や治療法は、眼圧降下に限られている。一方、緑内障は慢性的に進行する疾患のため、日々の食事や生活習慣が、緑内障の発症や進行に影響を与える可能性が示唆されてきた。我々は、2011年より国立がん研究センター、大阪大学大学院医学系研究科公衆衛生学教室、および筑波大学医学医療系社会健康医学研究室と共同で、長野県佐久地域ならびに茨城県筑西地域において、次世代多目的コホート研究（JPHC-NEXT Study）の一環として、眼底写真や光干渉断層計を含む眼科疫学調査を行ってきた。本講演では、我々の研究内容の紹介、国内・国外の共同研究からの知見を交えながら、緑内障のリスク因子の探索と今後の分子疫学研究の展望について会場の皆様と議論したい。



特別講演 II

『解説：ザギングアイ症候群』

後関 利明 先生

国際医療福祉大学 熱海病院眼科部長/医学部眼科学教授

後天斜視の発症率は4%と報告があり、その原因疾患の第一位（18-32%）はサギングアイ症候群（SES: sagging eye syndrome）です。SESは2009年に米国UCLAのDr. Demerらが提唱した疾患概念で、眼周囲の結合靭帯である眼窩プリーの加齢性変化によって発症する斜視で、年齢と共に発症率は増加します。SESは約10 Δの遠見のみの内斜視（開散麻痺様）と、約4 Δの外方回旋を伴う小角度の上下斜視を来します。近見のカバー・アンカバーテストでは小さな眼位ずれであるため検出できないことがあります。また、患者の訴えは斜視を連想させる「二重に見える」のみでなく、「ぼやける」「乱視っぽい」など斜視を連想しない訴えもあり、緩徐に進行するため老眼と勘違いしている患者も多いです。本講演では、SES患者の診断のポイントと治療を中心に講演をさせていただきます。きっと皆様方の外来にもSESはいらっしゃいます！

共催：兵庫県眼科医会 / 参天製薬株式会社